



1989年(平成元年)
10月号(No. 532)

社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価一部 150円

目次

- 九州・奥祖母山地とツキノワグマ
松本征夫……………(1)
- 海外の山……………(2)
- 「山の名、民族の名」
平成元年各担当理事の運営方針について(2)、委員の委嘱について、
委員名簿(2)……………(3)
- 会員アンケート結果報告(3)
西村政晃……………(4)
- 東西南北……………(7)
- 「金峰山雑記」「黒部源流の秘境」ほか、
海外より……………(9)
- 自然保護随想……………武田満子……………(10)
- 図書紹介……………(11)
- 「山岳飛翔」他7点
追悼・森 喬……………(12)
- 報告
第13回若葉会、石間信夫氏講演会、リンジャン山に登る、熊本支部夏季例会
ルーム日記、会員異動……………(18)
- お知らせ……………(18)
- 図書受入報告……………(18)
- 新入会員、住所表示変更、訂正……………(19)

九州・奥祖母山地とツキノワグマ

松本 征夫

本年八月二日環境庁は、昭和六十二年十一月二十四日、奥祖母山地大分県側の笠松山中腹で射殺されたツキノワグマは野生であったと発表した。というのは、そのクマの犬歯四本の摩耗が著しく、飼育されていたとの疑がもたれていた。飼育すると金網などに噛みつくため、犬歯がよく摩耗するとの理由からである。

奥祖母山地の主峰祖母山(一七五七m)は、かつて九州の最高峰とされたこともあってか、ウェストン氏の登山記録もある。同山地は、部分的に昭和三十七年四月国定公園仮指定、同四十年三月に同本指定された。しかし、自

然保護の立場からみると、それまでにいろいろと問題があった。
昭和三十五年三月、熊本営林局の施業案審議会は、大正十四年以来学術保安林であった祖母山東面のそれを解除した。実はそれ以前から、営林局は尾平鉱山から保護林境まで四〇の林道を設け、伐採の諸準備を整えていた。これも独立採算制のなせる業である。これに先立ち、昭和三十三年大分県宮崎県祖母山自然公園開発促進協議会は、その資料として『祖母・傾』を、しんつくし山岳会は昭和三十四年、自然保護を目的として『祖母大崩山群』を出版した。

前述の保安林解除で、最悪の事態に直面した私たちは、故加藤敦功氏(JAC会員)を中心に各方面に働きかけるとともに、事は急を要するため九州山岳保護協会を設立し、昭和三十五年六月の九重山山開式から、祖母山東面の伐採反対を目的として署名運動を展開した。日本自然保護協会、日本生態学会、九州各県の山岳連盟、下流側の井路組合など、それぞれの立場で伐採反対運動がなされた。

とくに日本自然保護協会関係者六名は、同三十五年七月山崎林野庁長官と会見し、同協会が調査するまで同地の伐採中止を申し入れた。六名中には当時JAC会長であった日高信六郎氏もおられた。この間、中央のJAC関係者として、横有恒、冠松次郎、武田久吉、田部重治、藤島敏男、村井米子、川崎隆章、石原憲治、深田久弥、足立

た。その一部は同協会誌『自然保護』七号に特集されている。また九州大学を中心とした生態学研究者は、長期的にこの山地の総合調査と研究を開始した。

昭和三十七年日本自然保護協会は、前年厚生大臣より自然公園審議所に諮問された国定公園候補地の選定に関し、祖母山東側山腹の保護計画が行われることを希望する旨を付記して適当であると答申した。

以上が国定公園指定までのほんの概略である。さて、その後二十数年経過した現在はどうであろうか。祖母山以東の自然林は残っているものの、傾山、大崩山一帯は伐りまわられて、山肌や溪谷は荒れ、見るも無残な姿と化し、昔日の面影はほとんど消え失せようとしている。

日本山岳会事務取扱時間

月、火、木、土曜 10時～20時
水、金曜 13時～20時

日曜・祭日は休み

図書室開室時間

日曜・祭日・月曜を除く毎日
13時～20時

源一郎、石井鶴三各氏をはじめ多くの方から賛同と激励を得た。
日本自然保護協会は、昭和三十五年から翌三十六年にかけて調査を行ない、私も二回これに参加し

お知らせテラップ電話
234 六六五九

となれば見立の獵師井川米一郎(私は山行を共にしたことがある)が捕った昭和十六年のことで、同じ笠松山の宮崎県側であり、実に四十六年ぶりのクマである。本山地に現存するクマは個体群を維持する最低頭数と推測される。クマやカモシカそのものに保護条例を作っても、獣たちが安住できるのはある広さをもった自然林でしかあり得ない。原生林を亡くし、杉、松の植林地に変えることは、山の主人公である獣たちの住家を奪うことになる。

志賀重昂氏が「日本の風景を保護するに力めざるべからず」と訴えているが、明治の先人が今日の姿を見て何と嘆くであろうか。国民共通の財産である自然林を林野庁にのみまかせられない。昨年暮、林野庁長官の私的諮問機関である「林業と自然保護に関する検討委員会」が、祖母山・傾山周辺を含めて全国十二カ所の森林生態系保護地域を答申した。これはこれとして評価されるにしても、あまりにもおそきに失したと思う。何としても、これ以上の自然林伐採を即刻中止してもらいたい。

(福岡支部自然保護委員)

海外の山

山の名、民族の名

中国・青海省と新疆ウイグル自治区の境界に位置する新青峰(六八六〇呎)と呼ばれる山について、四年半前、一九八五年四月のこのコラムで書いたことがある。アムネマチン(六二八二呎)に次ぐ目玉として、東崑崙に位置する省内最高峰のこの山を近く開放することを考えている、という青海省登山協会幹部の話を紹介したのだ。

その新青峰に、昨年、今年と二度日本隊が挑戦した。日本ヒマラヤ協会隊と京都山岳会隊で、どちらもめざす主峰には登頂できなかったが、六千呎峰が二十以上も連なる長大な新青山群についての報告は、興味深かった。知りたいと思った一つは、山の名についてである。

新青峰は、省と自治区の頭文字をつないだ名で、もととは、布喀達坂(プクダパン)あるいは莫諾馬哈達坂(モノマハダパン)と呼ばれてきた、と現地の登山協会幹部は言っていた。プクダパンは、プク地方の一番高い山の意味で、モノマハダパンは、一九三二年、この山に登ったロシア人が自分の名を勝手にかぶせて命名したのだ、との説明だったので、コラムにもそう書いた。ロシア人の命名を嫌って、一九八二年に地図を作る時、プクダパンの名にした、「新青峰」の別名もある、とその時は聞いた。

いまは、「新青峰」に統一されたようで、日本の二つの隊も一貫してその名を使っている。しかも、未踏の処

女峰として登場したのだから、ロシア人が登ったという私の記述は間違っていたことになる。東崑崙の一角に足をのこしたロシア人が、その最高峰に自分の名を託したのかもしれない。それとも全く別の探検物語が存在するのかもしれない。

山の名には、民族の文化と歴史が秘められている。世界最高峰に以前からチベットやネパールの名があることを知らず「エベレスト」とやってしまったのは、今も地理学の苦い経験である。おせっかいめくが、省の境界にあるから「新青峰」では、つまらないではないか。

この春、チベットのクーラカンリ中央峰をめざしたものの、ラサの動乱でこの新青峰への転進を余儀なくされた京都山岳会隊は、異常気象で登頂できなかった。遠藤京子隊長によるその報告と写真が「岳人」誌に掲載されているが、そこに「道すがら、チベット族、ハザク族、蒙古族がしっかりと大地に根を張って生きている姿を見た」など何度かハザク族の名が出てくる。とりわけ「ハザク族の生活力のたくましさには驚いた。彼らは新青峰の近くまで砂金を採りに行くのである。その数三万―五万人」のくだりには、びっくりした。現場は青海省内であり、ハザクの人々が何万もそこで砂金掘りしているなんてその地域に近い黄河源流地帯で数万の砂金掘りの人々を見たことのある私には、考えられなかったからだ。遠藤隊長によれば「回族」としたのを行き違いから編集部が勝手に「ハザク」に変えてしまったため抗議、訂正を約束させた、とのことでまたまた驚いた。そんなレベルで活字が作られてはたまったものではない。

地球が身近になった時代、山登りに関わる人間は、山と周辺民族の個性をもっと知ってい。 (江本嘉伸)

海外の山

平成元年各担当理事の

運営方針について(2)

(7) 遭難対策委員会 (小林)

会員の高齢化をふまえて、遭難予防を重点におき、いろいろな分野(医療、装備、体力、保険等)における情報提供や啓蒙活動を、各委員会や専門家とタイアップして活動する。

具体的には、各分野のシンポジウム、勉強会を山行準備会ともドッキングして実施する(例、救急法、トレーニング、健康管理、山岳保険の種類や加入方法等……)。

他に最新のレスキュー方法等についての文献も蒐集する。

(8) 海外連絡委員会 (藤本)

地域別に担当委員をおいて、当該国の主要山岳会との連絡を密にし、一般商業誌では入手し難いような情報の入手につとめ、必要に応じて会報等を通じて、会員に紹介したい。

海外からの諸々の問合せや、訪日外国山岳会員の世話等についても、総務担当理事と協議の上、適宜処理し、ますます多様化すると思われる国際的業務の迅速な対応に当たりたい。

(9) 青年懇談会 (早坂)

ここ数年來、メンバーが固定してし

まっております、若手の入会が少く、壮年懇談会になりつつある。

そこで、学生部指導委員会と一体になって、若返りを図り、青年懇談会としての活性化を図りたい。

委員の委嘱について

会員各位におかれては、各委員会の委員が、どのようにして選任され、どのような活動をしているのかということについては、充分にご存じなく、この点について説明して欲しい旨の要望もありますので、委員委嘱状発行を機に、この点について説明したいと思えます。

●委員会制度

委員会の名称が会報紙上に登場してくるのは、戦後になってからで、その代表的なものに一九五二年四月にマナスル登山の実施を目的として設置された「ヒマラヤ委員会」があったことはご承知のとおりです。

その後、国体委員会、海外登山審議委員会(これらの委員会は、何れも所

期の目的を達して解散しています)等……必要に応じて委員会の数は増加しました。

委員会制度そのものが、制度として明確になったのは、一九七二年の十一月になってからで、定款第四十九条に基づいて定められた『細則』に明記されてからであります。即ち、『細則』には、「本会の業務処理のために委員会をおき、会長は委員会別に担当理事を委嘱すると共に、若干名の委員を原則として役員を経験しない会員の中より委嘱して、委員会を構成する。任期は二年。委員長は必要に応じて委員の互選で置く。」ことが明記されています。

●委員の委嘱

一九八九・九〇年度任期の委員については、別稿「委員名簿」の通りですが、これら各委員は、担当理事の推薦↓理事会の承認↓本人の承諾↓委嘱状の発行という手続きを経て選任され、合計二一二名の方々に委員をお願いすることになりました。

●委員会の任務

現在の会員総数四五〇〇名の中、首都圏在住の会員と、地方在住会員の数は、ほぼ二分分されています。

この点からも委員会の活動は、在京の委員だけのものではなく、広く全会員の意見を代表し、全会員のニーズに

応えることが必要です。この点については、開かれた山岳会として、大いにご意見をお寄せ戴ければと存じます。

この二年間、理事会としては、担当理事を中心に、選ばれた委員各位の協力のもと、一体となって会務を遂行していく所存です。

会員各位のご協力を重ねてお願いする次第です。

(総務担当理事)

平成元年度各委員会の

委員名簿(2)

海外連絡委員会

藤本敏行(理事)、吉沢一郎、宮下啓三、倉知敬、三辺夏雄、田村俊介、神崎忠男、梶正彦、伊丹紹泰、磯野剛太、吉田宏、酒井敬士、前神直樹

遭難対策委員会

小林政志(理)、入沢郁夫、松田雄一、松永敏郎、中川武、関口令安、新井陽一郎、柳沢昭夫

青年懇談会

早坂敬二郎(理)、鈴木郭之、村井龍一、橋本清、山本浩、山下六郎、宇田川芳伸、絹川祥夫、小笠原岩雄、山本宗彦、相馬勉、北村貢、大谷亮、熊崎和宏、大貫敏史、山本篤、大西宏、佐藤正倫

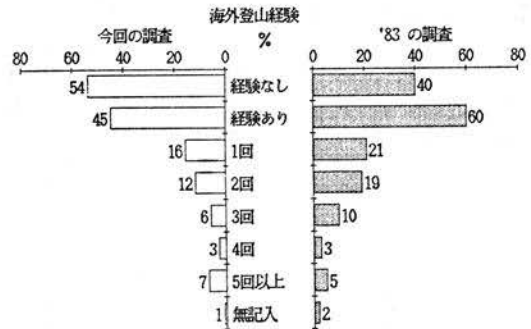
会員アンケート結果報告 (3)

2回にわたり、アンケート結果のうち、会員の皆さんのプロフィールを中心にご紹介しました。

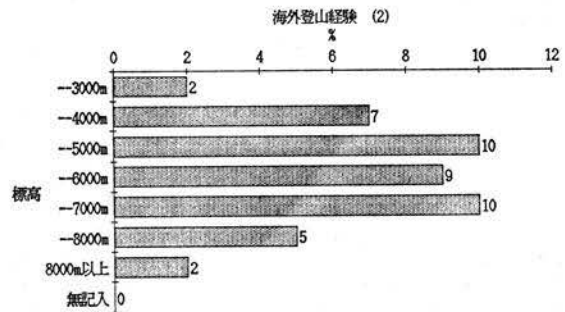
今回は具体的な活動状況、意向などの結果と若干のコメントを添えてご報告します。

11. 海外登山経験

海外登山（トレッキングを除く）の経験者は 45% と高率。しかも、7% の会員が 5 回以上の経験を有している。在籍年数の短い会員の海外登山経験が少ないため、前回に較べると経験者比率は 15% 低くなっている。



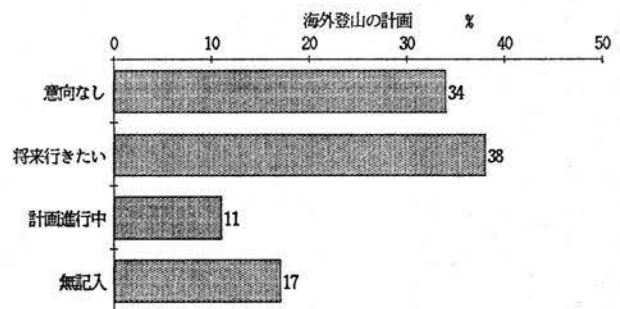
海外登山の経験の最高高度の分布を見ると、6,000m 以上が 17%、8,000m 以上だけで 2%、と高所登山の活発なことを示している。



12. 海外登山の意向

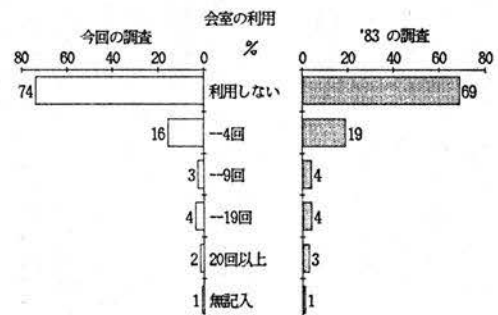
前項で海外登山の経験者は 45% と高いことが分ったが、さて今後の意向はいかが？

答えは「計画進行中」を含めて、実に 49% である。今後当会の長期、短年度の各種の事業計画の立案の際に参照すべき数字の一つであろう。



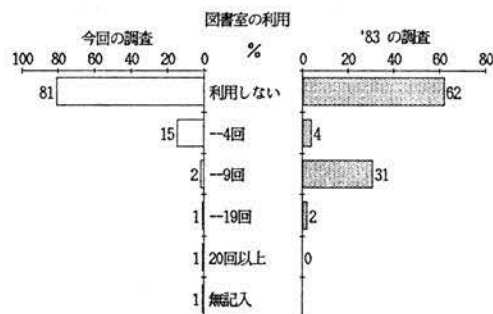
13. 会室の利用

会室を利用したことのある会員は 25% である。前回調査に較べると、5ポイント減少している。関東地方の居住者が 45% であることをつぎ合わせると、もっと利用が増えてよさそうである。



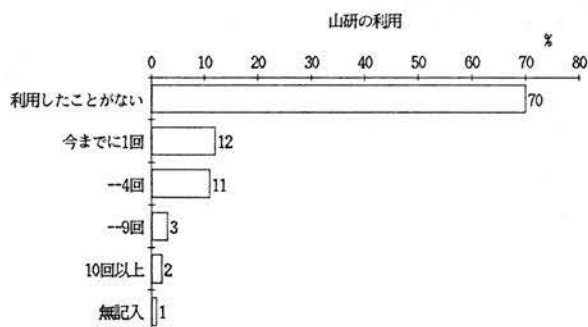
14. 図書室の利用

利用経験者は19%である。施設の性格から低くなりがちであるが、会室同様もう少し利用が増えてもよさそうである。



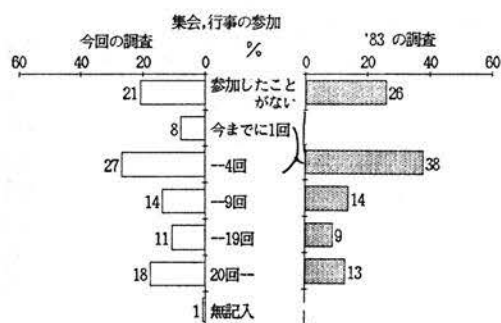
15. 上高地の山岳研究所の利用

今まで1回も利用したことがない会員が70%と著しく多い。後の質問で強化充実したい事業に「山小屋の建設」が36%と、第2位であることを考えあわせると、今後、長期的には、上高地という立地を生かした施設のコンセプト変更が検討課題となろう。



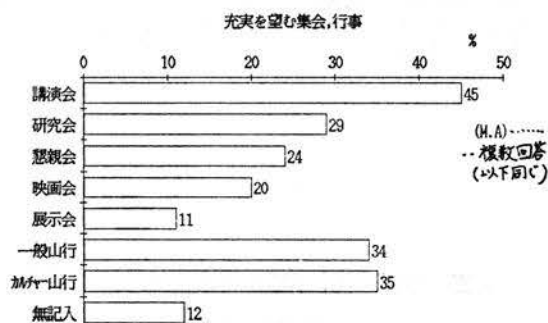
16. 集会、行事の参加

集会、行事の参加は、前回に比べ高くなっている。しかも参加の回数が増えており、当会の活動が活発化していることを物語っている。

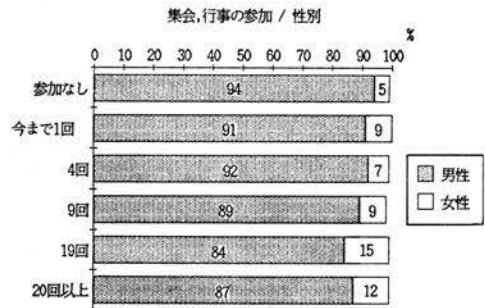


17. 今後充実を望む集会、行事

「講演会」がトップ(45%)を占める。「カルチャー山行」35%で二番目に高いのが注目される。

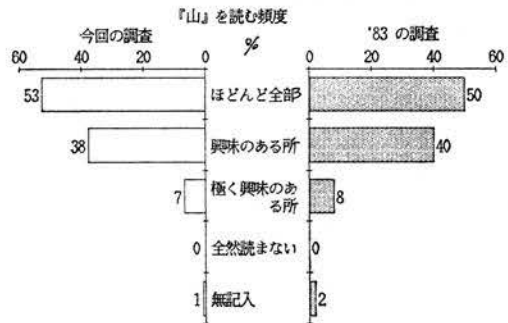


性別でみると、女性会員（構成比 9%）は男性会員に比べ、参加者が多く、しかも参加頻度も高い。

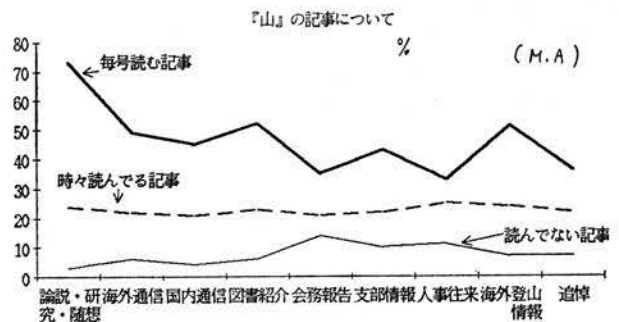


18. 会報「山」の利用

会報「山」はよく読まれている。「ほとんど全部」と「興味のある所」を読む人で 91% を占める。前回調査もほぼ同様な傾向であった。事業のうちで、今後も会員の期待が寄せられる重要なものの一つであることがうかがえる。

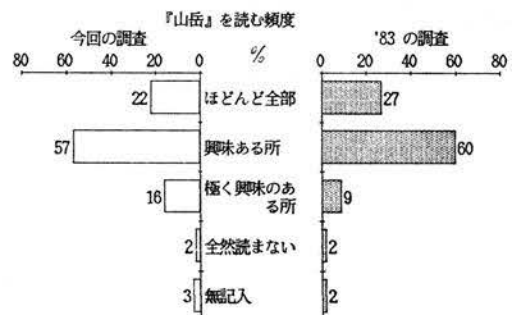


“読む”のポイントが高く、“読んでいない”のポイントが低い記事と、その逆とがグラフの形で読みとれる。「山」の編集の紙面配分などの参考の一つとなろう。



19. 年報「山岳」の利用

年報「山岳」も会報同様よく読まれている。



(文責 西村政晃, 作図 小林政志)

(次号に続く)



金峰山雜記

高田 眞哉

金峰山(八五六四尺) 川上村の南部にありて、本郡と山梨県中巨摩、北巨摩の二郡に跨る、秩父山塊中の最高峰にして、東は国師岳に連り、西は黒森峠に延ぶ。昔時武田信玄金を発掘せしより此名あり、頂上に大己貴命を祀り、八月十四日を以て山開きの期として、其附近偃松密生し、雷鳥、雷獣等棲息す。全山樹木鬱蒼として昼尚暗く、人跡不到の地今尚存す。川上村川端下を貫きて甲州に通ずる一條の経路あり。(以下略)『南佐久郡誌』、大正八年)

六月十一日に行われた第二十八回金峰山開山祭に、甲斐国志にもある信州口の一道を辿り、三年ぶりに参加した。山頂の五丈岩(御像岩)前で行われる

神事は、雨天のため急きよ変更され、直下の金峰山小屋内にしつらえられた祭壇を前に、川上村役場代表、金峰山小屋管理人・林袈裟夫氏、金峰山神社氏子総代らが見守るなか、神官による式次第が厳肅に執り行われ、私も指名を受け神前に櫛を供え、安全登山を祈念した。

川端下は、川上村では一番古い部落と伝えられており、かつては信仰登山の基地として重要な位置を占めていた。原全教氏によると、「有名な金峰山の信州口の一道路として徳川時代から明治十年ごろまでは繁栄を極めたものであった。大きな宿も三軒あり、毎日々々満員の盛況であつて。勿論普通の家へも、五人十人と分宿し、それらの道者が、ことごとく川端下から案内者をつけ、以前あつた中宮で泊るか、または頂上の本社で泊るかして、黒平や小尾へ増富へと下った。」(『奥秩父続編』、昭和十年)とある。

中宮については、「この中宮と云ふのは、金峰の足溜りとして、随分繁栄したもので、明治少し前まで、神官が在居してゐた。建物は明治になつてもまだあつたさうだ」(同著)と記している。

この中宮跡は現在通行禁止となつてゐる中ノ沢にあり、広さ約三十坪、石

垣積みの跡が今でも残っている。

頂上の本社は、「ここには檢作の籠堂が建てられ、内部に檜の七重の扉の厨子を置き、その中には黄金の大黒像を安置し、尊前には三十人位宿泊が可能であつたと云ふ。所がその黄金像を盗み出す為、之に放火し遂にその目的を達したと云ふ。この堂の焼けたのは今から二十五年程前であると云ふが、明治十七年頃にも焼けたと云ふから或は二度焼けたかも知れない」(『奥秩父』、昭和八年)

高野鷹蔵氏は明治三十九年十月二十一日に金峰山に登られ、「十時大石を一飛びに上れば、五丈石の下、岩陰に作れる神社に詣づ、構造小なりと雖も粗ならず、蔵王権現を祀れりとか、板葺屋根を更に板圍ひしてあり、雨漏りて床も破れぬ、何某何講など例の如く樂書せり、吾れも亦名札残してけり」(『山岳』二年一号、秋の金峰山)と記しておられ、同氏撮影の金峰山頂上蔵王権現の写真も掲載されている。

この時はまだ本社も残っていたが、辻本満丸氏は、「四十日後に発見山梨県下に風光の美を以て有名なる中巨摩郡宮本社御嶽金桜神社奥宮金峰山社炎上し灰燼に帰したるを十一月二十五日に発見したり、同所は人馬の往復殆んど絶えたる地なるにより何日の出来事なるか不明なるも先月二十日頃の

出来事ならんと察せらる。発火の原因は多分登山者の過失に由るものならん(『山岳』五年一号雜報、甲州金峰山奥宮の焼失)と報告されている。

南日(田部)重治氏は、明治四十二年十月十八日に金峰山に登頂され、「此時はじめて奥の院の焼失せるを知りたり」(『山岳』六年一号、十文字峠を越え信州梓山より甲武信、三宝、金峰の三山に登る記)と述べられており、明治四十一年に焼失して以来、頂上本社の再建は行われなかった。

「頂上は大己貴命社あり。往古は本村の持ちたりしに、中古甲斐国山梨郡御嶽村へ属して祭れり」(『長野県町村誌』川端下村の項、明治七年)とあるように、かつて山頂の奥宮は信州側にあつたものだが、それが甲州側に移され、金桜神社の奥宮となつた。

明治年間には川上村と山梨県の間で県界論争が絶えず、これは主として金峰山頂の境界および同所金峰山神社の

☆村井米子追悼集

投稿三十七名(一〇五頁)

☆川森左智子追悼集

投稿三十八名(一〇四頁)

日本山岳会婦人懇談会有志編

頒価 各一〇〇〇円(送料 一

冊二一〇円、二冊二六〇円)

争いであった。

とはいえ、川上村の秋山、梓山、川端下部落の氏神は金峰山神社であり、秋山の氏神は里宮になっている。

川上村に残る宝暦三年（一七五三）の年号覚えに、「ち志よう上人金峰山御山開きてより此方九三九九年に成」とある。これは弘仁五年（八一四）にあたるから、歴史の古さが窺える。

金峰山小屋が昭和三十五年に建設され、最初の一、二年を除いて開山祭が今日まで続けられているのも、あながち故無しとはいえないと思う。

ちなみに、金峰山は甲州側ではキンプサンと呼び、また山名としては一般的だが、信州側ではキンポウサンと呼んでいる。

黒部源流の秘境

高天ヶ原 夢の原

北アルプスに再び行けたら、三十年前に毎年いろいろのルートから登った、黒部源流の山や谷を歩きたい……と思ったのは七年前だった。

夏のスイス行が終わったかと思いつつ、やっと今夏七月山仲間との約束もあって、三十年振りの雲の平―高天ヶ原―鷲羽岳―三俣―双六―鏡平―檜見温泉と、年相応に中高年女性向きの計

画をたて、折立から太郎平小屋を振り出しに、のんびり一週間をかけて歩きました。

黒部源流のなつかしい自然は少しも変ることなく、変わったのは高天ヶ原山荘からさらに奥、大東鉱山の元温泉小屋の対岸に混浴の野天風呂ができ、旧小屋は女性風呂になっていました。その奥の夢の原も竜晶池も笹やぶの路跡を辿って訪れてみましたが、昔と変わらず寂境が保たれていて嬉しくなりました。高天ヶ原山荘の管理人から、指導標をたてないでなるべく荒らされないようにしていると言う話を聞き、何時までも秘境を保護して欲しいと思いました。次に変ったことは山小屋が立派になったこと、太郎平小屋では五十嶋さんが宿泊者に天気予報と道の状況を放送して、下山ルートの安全を計っていました。薬師沢小屋前の昔笹渡しだった谷に立派な橋が出来、三俣山荘は展望レストランで伊藤夫妻にコーヒーでもてなしを受け、双六小屋では久しぶりに小池潜君に再会しワインで乾杯、各小屋で久しぶりのおときさんで大歓迎でした。今回は高校山岳部のパーティーには沢山会いましたが、若い社会人が少なく、中高年者とファミリー登山者で、装備服装もまちまちで、きまったスタイルはあまり見られず、割合に軽装でした。

双六池付近には昔の場所にまだクロユリが咲き残っていました。

昔下った大ノマ乗越しルートは現在殆ど歩かれず、鏡平山荘ができてから、この池に写る槍ヶ岳の姿が素晴らしいので、この下山路が一般に歩かれるようになりました。

昔秩父沢が大雨で増水すると、渡渉が危険でしたが、鉄の橋ができて安全に渡れました。今年三十年振りに生きてまた再び時間をかけても歩けた事を幸と喜びました。（坂倉登喜子）

あづみ野ウエストン祭

常念岳の山ふところ、長野県は南安曇郡堀金村（猿田国夫村長）で、「あづみ野堀金―ウエストンin須砂渡」と銘打った山のイベントが行われた。主催者は同村村おこしイベント実行委員会、七月三十日（日）のことだった。午前九時半にはウエストン音楽祭でスタート。午後十二時半からはゲーム大会、午後二時からはミス須砂渡コンテストが行われた。こころはキャンプ場からウエストン記念館（一志信一郎館長）、山口家（山口裕氏）、ウエストン像と巡る回遊コースも工夫され、それぞれの場所に記念スタンプが用意されていた。（田畑眞一）

百四十七歳、

トムラウシ山登頂

平成元年七月十五日。天人峽からの長い道のりも、すばらしい展望に助けられて何とか乗りきる。ヒサザ沼の小屋に着いたとたん、帽子の会員章に三ツ石清氏が気づいて握手。はじめての、しかも単独行の私には力強い同志。何くれとないご親切が身にしみる。

十六日。快晴。百四十七歳のコンビで長大な雪田を登り、待望のトムラウシに登頂。彼のわかれた紅茶で祝杯。私にとり九十五番目の「日本百名山」だ。大雪山系の壮麗な姿にあらためて感動。彼の説明でエゾコザクラ、ジンヨウキスミレの花も知った。楽しさのあまり頂上で二時間も滞留し、別の雪渓を降って小屋に戻る。

十七日。五色ヶ原に向う三ツ石氏と化雲岳頂上で別れを惜しみ再び天人峽へ。百名山は私にはまだ利尻、塩見、聖などが残っている。七十一歳

岡村治彦（5241）

七月十四日、午後三時北見市を車で出発。クモセンベツ川とニシキ沢との出合まで。途中の林道のゲートには錠がしてあった。出発十分で徒渉点。沼の原大沼に、北見新聞記者の岳友Y君

と幕営。十五日、長い木道を行く。ミツガシワが一杯咲いている。雪溪をいくつも行く。化雲岳までの道の上に、ヒグマの糞が三ヶ所あったが、古いもので安心する。

このコースは、登山者は少い。辺りは花一面だ。花を撮りまくる。ヒサゴ沼で岡村氏に会う。四本爪のカンジキは七十六歳の私と彼には、雪溪での登降が楽であった。ヒサゴ沼幕営地で、環境庁自然公園指導員の私は、ハクサンイチゲ等の上を、平気で歩く人に注意する。大雪山系では、忠別岳と美瑛岳の間が未踏の私には、このトムラウシ行ほど嬉しいことはなかった。七十六歳

三ッ石清 (1936)

詩・富士の雲

石田 喜八

八合目

暮方 一日舞った霧が消え
西の空が朱くなった
白いちぎれ雲は 次々と焼かれ
富士の夕開が濃くなった

ご来光

溶岩の苦しい登りを
みんな停めている まだ薄明の空
水平の雲の峰の一点が
光と二重写しになる

一閃の動 人々は合掌する

剣ヶ峰

南も八ツも 夏の沸騰に霞み
威容は鈍い
ただ前景の鎖り状の雲が
如何にも剽悍で

それも三層になって
富士を遊んでいる

(一九八九・八・十二・富士山)

海外より

シャモニーより

我々一行五人は、十二日シャモニー着。十四・十五の両日、絶好の好天に恵まれ、無事モンブランに登ることが出来ました。

三十一歳のマナスルで七五〇m、

三十八歳のヒマルチュリで七一〇m、六十七歳の今回が四八〇七m。恐らくこれが生涯で最終の最高高度かと思うと感無量です。十六日にはツエルマット、十八日はグリンデルワルトに行きました。時間が無かったので、プラバントさんには電話で横さんの弔辞への謝礼、その他挨拶をしました。訪問の時間が取れず残念でした。ではいずれ拝眉のうえ。会員各位に宜しくお

伝え下さい。(七月十八日付、シャモニーにて 山田二郎)

山田二郎

「編者注」その後ブラヴァント氏より「横有恒の追憶」と題した小冊子が本会に届いておりますが、山岳八十四年号で紹介の予定です。

Bangor 21

前略 英国に三ヶ月滞在の文部省派遣で来ておりますが、Snowdon へ行って来ました。岩登りのメッカとして聞いていましたが、行きはアプト式の登山電車で、頂上へいったあと、Crby Dystal へも行きました。このピークから東への尾根をおり、また登ってききました。このコースは Classic Climbs にものっているコースの、程になります。頂上付近以外にも多くの壁があり、ロープを肩にした若者たちが多く見られました。 6180 齊藤 晋

ナンガ・パルバットより (II)

お世話になった皆様に悲しいご報告をしなければなりません。馬場哲也隊員が七月十六日午後十二時二十分、C3直下(約五七〇〇m)地点にて落雷を受け、同十八日午後八時五分死亡しました。BCに降る途中五二五〇m地点でした。全隊員、彼が亡くなって

十日も経つのに、まさかといった感じで、現実がよくわかりません。

私にとっても、この十年余りを振り返れば、いつも馬場君がいたので、彼の死を現実のものと感じるのは、帰国してからでしょうか。

七月二十八日、ギルギットにて馬場君の遺骨をご両親にお渡しした後、登山活動を再開する予定です。二週間の遅れが生じたので、どこまでやれるかわかりませんが、慎重に行動したいと大きく決意しております。

(七月二十七日、BCにて、早坂敬二郎)

ナンガ・パルバットより (III)

七月二十九日より登山を再開。悪天のためルートはなかなかのびなかったのですが、C3、C4への荷上げは計画通りでした。八月四日から本格的にラキオトピークの斜面にC5を作るべくルートワークに入りましたが、積雪の状態は、不安定で、八月六日雪崩を誘発したことにより、目標をラキオトピーク登頂に変更することになりました。翌八月七日、吉野昌江隊員がC1とC2間でスリップし、右足を骨折するという事故を起してしまいました。メンバーの登高意欲はおとろえていませんでしたし、私自身も二年に亘り、

計画の実現に努力してきましたので、登山続行を強く望んでいましたが、リーダーとして二度に亘る事故の責任を感じないわけにもいかず、ギルギットに向う救援のヘリを見送った日の午後遂に登山中止を決意しました。

BCを撤収して戻ってきたギルギットはどんよりとした時折小雨のバラつく曇り空でした。ここにさしたる成果も上げることなく、私達の登山は終了しました。皆様のご厚情に何ひとつも欠けることの出来なかったことを深くお詫び致します。

(八月二十日、ギルギットにて、

早坂敬二郎)

登山国際会議花盛かり

◇ESCALADE 89 (仏シャモニー)

九月二十一日～二十三日

仏青少年スポーツ省、フランスオリ

ンピック委員会、UIAA主催

急な案内で時間的に間に合わないで、近藤等氏と相談の結果、フランス在住の方に出席を依頼。

◇KASS国際山岳映画祭(チェコス

ロヴァキアKASS)

九月十三～十七日。

今回は三国友好登山隊のフィルムなどが考えられたが、テレビ会社にも案内が来ているというので一任する。

【自然保護随想】

小 径

落葉が深々と積った小径を歩くときの登山靴に伝わってくるあの弾力のある心地良さを時々思い出す。秋の陽を浴びて歩いている時などは本当に良い気分になる。

山麓の長い道を車が登山口まで入るようになって、おや、このようなところにも?と思う山道に、かなりお年を召した方が、ヒールのある革靴で歩いておられるのを見かけることも多い。

まだ登山という行為が珍しかった頃、思案の上、一番はき馴れた上等の革靴で尾瀬へ入り、紅葉の山に降った新雪の中を歩いた話をされた黒田初子さんのことを思い出す。

その頃のことと、現在のこととは、同じヒールのある靴の話でも違っているはずなのだ。そのような人達とすれ違う山道を登って、見晴らしのよい峠や、小さな山頂に立つと、何故かもの悲しい気分になる。

六月のはじめ、主婦ばかり七人の一行は、登山ではなく旅行のつもりで、それでも少し歩きたいということで、全員ジョギングシューズにサブザックを背負っていた。

まだ、前週まで雪が残っていたという八甲田山へケーブルで田茂沼岳まで登る。山頂の周遊コースを歩く。木道がつづいている湿原を上から眺めて一周する。ここは自然の歩道であった。ついで、奥入瀬溪谷を子ノ口まで十

キロ程歩いた。谷水河の跡を思わせるV字谷である。

岩を噛む水と、新緑を透して見上げた青空は誠に美しかった。バス道路と平行して、溪谷沿いに小径がつづいている。何度か団体客をやり過すと、一行七名だけの静かさが戻る。自然のままの美しい小径で、ゴミも落ちていない。ベンチのある場所に置いてあるクズ籠も清掃がゆき届いていた。バスで八幡平へ向う。翌日も晴れ。藤七温泉の上の駐車場は満車の状態であった。残雪があり、一団のスキーヤーがスキーを楽しんでいた。八幡沼へ向うと、コンクリート舗装の道が山頂までつづいている。雪がまだ多く、雪を踏んで歩く。八幡沼のほとりの湿原には木道がつづいている。湿原はまだ眠ったようで、ショウジョウバカマだけがピンクの花をつけていた。ヒールのある革靴をはいている人達は、雪にはばまれて引き返していたが、雪がなければコンクリート舗装の道を歩かなければならない。沼を望む見晴らし良いところには、張り出しの展望台が出来ていた。

小径は、舗装されていなくても階段をつけてあるところも多い。歩幅が合いくく、歩きにくい道である。自然の道がなつかしい。だが考えてみると、木道やコンクリート舗装の道が、自然保護の役を果たしていることも見逃せない事実であることに思い至った。今では森林に限らず、人の手を加えて保全しないと自然が保護されない場所が多くなっている。寂しいことだが事実である。人の心に安らぎを与えてくれる自然を美しく残したいと思う。

(武田満子)

◇Montagna Avventura 2000 八山

と冒険二〇〇〇年V(伊、フィレン

ツェ近郊 CASCIANO 町)

十二月十一～十四日

名誉会員マライニ氏より、日本コー

ナーを作るので是非参加されたい旨の

要望があり、先方の招請を受けて、田

部井淳子、重広恒夫、神崎忠男の三名

なお、日本登山史の展示品については資料委員会が担当する予定。

◆第十四回バンフ山岳フィルム・フェスティバル

十一月三・五日、カナダ、アルバータ州バンフにおいて、カナダ山岳会、バンフ・センター等をスポンサーとして開催される。参加の映画・ビデオ作品は五部門に分れて審査され、入選作品には、それぞれ二〇〇〇ドルの賞金が贈られる。



図書紹介

山岳飛翔

大森弘一郎著

航空山岳写真という新しいジャンルでは、長い間日本がリーダーシップをとりつづけてきている。わが国を代表する、濱谷浩、風見武秀、白川義員といった写真家たちが、それぞれ優れた作品を生み出しているし、外国の登山家の記録や研究書にも、日本人の写真

が転載されていることが少なくない。

この分野で二十数年も活躍をつづけてきている大森弘一郎氏が、また、北アを中心として北海道から中国山地まで日本の代表的な山その四季折々の姿をとらえた、すばらしい作品集を公開した。これ迄のもの比べると、この本では単に地形やルートを正確に把握するだけでなく、空からでなければ見ることのできない山々の美しさを表現することに、いっそう多くの苦心をはらっていることがうかがわれる。朝日や夕日を浴びた山々をフライングにおさめたり、雲や霧のかかった峰々を至近距離から捉えるために、どんな苦勞をし、どんな危険をおかさなければならぬか、ということは、同じように長い間山を飛びつづけている私にはよくわかるつもりである。

とりわけアルピニストとして、対象となる山を知りつくしている上に、山岳地帯の空撮のためにライセンスをとって、操縦桿を握っている大森氏は、その強みを充分に生かして、普通ではなかなか得ることのできないシャッター・チャンスを見事に生かしている。しかし、航空山岳写真という同じビークを目指しているにしても、私とはかなり異なったアプローチをしているという点もないではない。私自身、世界中の山岳地帯で最もすぐれた山岳パイ

ロットに飛んでもらうことができたために、まだ一度も操縦桿にさわったこともないし、カメラを自作する代りに十数種の市販カメラをテストした結果モノクロ用もふくめて常時三・四台のカメラを機内に持ちこんでいる。

既に海外の山々の撮影も重ねている大森氏の、いっそうの活躍を期待しながら、同じ仲間の人として心からエールをおくりたい。

一九八九年四月、B4判変型上製、図版五〇頁、本文三一頁、岩波書店刊、定価七千円 (山田圭一)

おじさんたちの冒険

木村 幸治著

いわゆる働き蜂世代の「おじさんたち」六人の、余暇を活用した尋常でない冒険の物語りである。

例えば冒頭の吉岡嶺二氏の「中年の海」を超ダイジェストすると「十年前の四十一歳の文化の日に、自宅のある鎌倉腰越海岸から、布製の携帯用折りたたみ式のカヌーで、西に漕ぎ出し国府津まで航海、翌月の日曜日に国府津から真鶴まで」というように尺取り虫方式で漕ぎつなぎ、京都嵐山の渡月橋まで二年半がかりで到着。翌年は鎌倉から青森まで、一二〇〇*を走破。五十一歳の現在は裏日本側に挑戦中」と

というような具合。

そのほか「リヤカーでオーストラリア、アフリカを徒歩旅行した永瀬忠志氏」「自転車でアンナプルナ街道を走破した町田靖治氏」「六十五歳を過ぎて軽飛行機を三年がかりで手作り、自から飛ばした大和沢三氏」「気球で無着陸飛行の世界記録を達成した神田道夫氏」「フランスベッドのトップセールスマンが、極地の犬ゾリ国際レースに自費参加、二回とも完走した小嶋一男氏」など、それぞれの冒険をノンフィクション作家の著者が、スリル、六人の心理、生活、哲学、夫婦の綾などを含めて語っている。

三人のサラリーマンのほかは公務員、高校講師、自動車学校の経営者という顔ぶれだが、冒険を志す者にとつて職場との関係や同僚、上司との交流などは、無理な注文だが、さらりとふれた程度に終っている。

職場で重要な地位にあり、しかも仕事を人なみ以上にこなし、余暇に冒険を志した先駆者といえ、小島鳥水のことを思い出されるが、本書を読みながら改めて鳥水の偉大さ思った。

余談ながら「カヌーの吉岡氏」「リヤカーの永瀬氏」「犬ぞりの小嶋氏」の三人は、それぞれ自著を、本書の出版元の山と溪谷社を通じて出版していることをつけ加えておくべきだろう。

一九八八年九月、山と溪谷社刊、二
五四頁、定価一三〇〇円

(関塚貞亨)

梅海新道その自然

小野 健著

梅海新道とは北アルプス朝日岳から
長根山、大ケ岳を経て白鳥山に至り、
そこから旧北陸街道の坂田峠を越えて
尻高山を通り、急転直下日本海の親不
知に下る延長約三十キロメートルの新道である。
海拔三千メートルの日本の屋根と海拔〇メートルの
日本海とがこの新道によって初めて結
ばれたのである。

著者が会長をつとめるさわがに山岳
会が新潟県西頸城郡青海町の小さな山

追悼

森 喬(元会員、会員番号五九〇
番、大正六年十月入会、元ハンガ
リー特命全権公使)

八月二十一日死去。九十三歳。

同氏は一高旅行部、東京帝国大学
法学部在学中、日高、藤島名誉会
員等と上越国境の開拓期に活躍。
なかでも大正六年十月の日高信六
郎氏との野反湖からの白砂山登頂
(山岳第十四号第一号に「白砂山」
を執筆)、さらに大正九年七月に
は、藤島敏男氏と仙ノ倉山、谷川

岳会である。わずか七名足らずの会員
であったが、昭和三十六年より十一
年の歳月をかけてこのさわがに梅海新道
を開通させた。そしてその後も毎年こ
の新道と四つの山小屋の維持整備を続
けている。

本書はこの梅海の自然に憑かれた山
族野郎の新道伐開と整備の経緯を二十
七年間の写真と伐開日記の記録によっ
てアルバムにまとめたものである。

本書には「やぶかり道楽の記」とい
う副題がついている。生活を投げうっ
てのやぶかり人生は、著者によればも
はや趣味などといった生やさしいもの
ではなく、道楽としか言いようのない
ものだったのだらう。この道楽には次
の付録がついた。

岳に登山者として初の足跡を印さ
れている(山岳第十六号第三号
「奥上州号」に執筆)ことが特筆
される。氏は入会時より終戦まで
在籍。戦後は音信不通のまま会籍
を離れていたが、晩年は弁護士を
開業されておられ、日高氏の追悼
会には出席されていた。同氏の上
越国境の山々での足跡を紹介する
意味で筆をとりました。ここに謹
んで哀悼の意を表します。

(Y・M)

追悼

昭和四十六年「山族野郎の青春」
(山溪新書) 発刊

昭和四十七年 第12回山溪山岳賞受
賞

昭和六十年 第38回新潟日報文化賞
受賞

さわがに山岳会の夢とやぶかり人生
のドラマが展開したこの大事業はま
た、社会的にも十分に評価された道楽
であったのである。

新道開発が自然保護かといった議論
もあるかも知れない。しかし本書を一
見一読すれば、やぶだらけの青春の熱
気と、梅海の貴重な自然、ふるさとの
自然を紹介しようとする山族野郎の情
熱に圧倒されるはずである。

さわやかな記録である。そして梅海
の美しい自然の紹介にもなっている。

一読をすすめたい。

昭和六十三年十月 さわがに山岳会

刊 A4判 厚表紙 全一二三頁

カラー刷り

〒949-03

新潟県西頸城郡青海町相生町

小野 健 TEL (0255) 62-

6758 (田中純夫)

画文集「道ひとすじ」

山里 寿男著

本会のスケッチ山行でお世話になっ

ている山里寿男会員の新聞である。穂
高に始ってヒマラヤに至る先生の山歴
をまとめられたものだ。いわば立派な
山の本である。しかし山の本としては
頗る異色あるものだ。画が半分、文章
が半分その間を珠玉の詩がつないでい
る。一見楽しい本だが、よく読むと楽
しいどころではない。岩登りが出てき
て人を驚かす。山の絵の精進も命がけ
だ。その中にも「だんだん恐ろしく無
くなった」と正直な告白があつて、天
真爛漫な先生のお人柄がほほえまし
い。前穂東壁を描くために四峰の明大
ルート(東壁見物に最適の場所)に登
り確保を受けながらのスケッチ行なぞ
画家の執念以外の何物でもない。
「邂逅」では、山との結びつきが語
られる。

「モンゴル紀行」は文章でなく絵物
語。次いで欧州アルプスの山々を訪れ
て「マッターホルン山頂に立つ」壮挙
がある。そこでもスケッチブックがつ
いて廻る。「デッサン帳」で一転して
緊張がほぐれ、随想十篇。「早春の穂
高」で馴染の老ガイドを語り、「翔け
る魂」で深田久弥氏を偲ぶ。「燕岳と
モーツァルト」は中学四年生から始つ
たクラシック音楽の素養が燕岳を演出
して先生の別の顔を教えてくれる。こ
こで本の半分が残り残り半分が「ヒマ
ラヤ」篇となる。深田氏と識り合った

頃、深田さんから「君もいつかはきつとヒマラヤの山々を描くようになるよ」と、よく言われたそうだ。その実行が「チベットへ至る道」となって、カトマンズの生活、ゴラバニ峠行、ツクチエへのトレッキング、エベレスト登山隊の根拠地訪問等で詳細に紹介される。もちろんスケッチしながらの旅で車の中からのスケッチの話など感銘の深いものだ。最後に「初のヒマラヤ横断一〇〇キロ」の記事が錦を飾る。高山病に苦しみながら歩きつつスケッチをし、夜はテントの中で着彩をする苦難の大旅行の話で、山男としての山里氏の姿が淡々とした、さりげない筆だけに却って印象深い。今後二度とお目にかかれない本の一冊であることは確かである。

一九八九年五月、筑摩書房刊、二二六頁、定価二四七〇円

(河野幾雄)

おいらく山岳会30周年記念号 「山行手帖」増刊

おいらく山岳会編

平成のいま、日本の山々は中高年登山者であふれている。すさまじい中高年パワーの生きがいの爆発である。山にはむしろ若者の姿の方が少ない。その良し悪しは別としてこんな状況を今

から三十年前に誰が想像しただろう。それがいたのである。いまや中高年登山者たちの中心的核となっているいわゆる「おいらく山岳会(OMC)」の先達たちである。

男女を問わず四十歳以上でなければ入会資格がない会。発足当時、こんな新聞記事に目をとめたとき(当時筆者も若かった)、そのユーモアあふれた名前とともにまことに奇異なものに思った。それだけにその前途がどんなものになるかと興味深く、かつ危ぶみさえしたものだ。

おいらく山岳会は昭和三十八年、小栗善一氏を中心とする四人の先覚者によってささやかに呱呱の声をあげた。そして爾来三十年、どの組織にもあるいくつかの困難とさまざまな人間ドラマを乗り越えて、今日、会員二九〇〇名を擁する日本の一大山岳会にと奇跡の発展を成しとげたのである。

「山行手帖」とはこの会の会報ともいべきものであろう。そして本誌は会の創立三十周年を記念して増刊されたもの。その内容はおいらく山岳会が草創、躍進そして充実期へと歩みきたった足どりが、その時々「山行手帖」よりピックアップされ上手にまとめられ、いかにもOMCを愛する人々らしく読む人の心をなごませてくれる。本誌で何より目を見はるのは「山行

三十年のあしあと」である。第一回から昭和六十三年十二月末までの山行回数は実に九六九五回を数えており、本文七二頁から一六〇頁にわたっているのに驚く。そしてその間の大きな事故はわずか四件に過ぎない。まさに年齢にかかわらず精力的な活動とともに、幹事(リーダー)諸氏の苦勞のほどが偲ばれるのである。

本会(JAC)でも先般のアンケートにも見られる通り確実に高齢化への道を歩いている。本書を繙くことによつて山へ生きがい求めて本会に入会する中高年登山者対策へ、ひとつの示唆を与えてくれるのでなかるうか。是非一読をおすすめる。

なお、最後に本書の編集、刊行の大きな牽引力となったのは佐藤節氏で本会々員でもある。労を多謝したい。

平成元年七月、A5型、おいらく山岳会発行、本文二九一頁、頒価八〇〇円(郵送料八一円)(小倉 厚)

ネパール研究ガイド 文獻目録補遺(稿)

秋山恭子・秋山俱子編

ネパール研究ガイド―解説と文獻目録が日本ネパール協会編として発刊されたのが一九八四年十一月であった(詳細な図書紹介を佐々元会長が本紙

四八〇号に載せている)。その中心的編集者が秋山ご姉妹であり、発行を見るまでに十年余を要したと聞いている。ご苦勞の程が察しられる。

昨年十二月その補遺が同じ編者によって私家版として発行されたが、編者と資料提供者の堀込静香さんのご苦勞とご努力に対して再び敬意と感謝を捧げたい。編者の言葉によると、この度は一九八四、一九八五年に発行された文獻を収め、一九八六、一九八七年については、単行本を中心に採録したことである。今度は補遺であるので解説こそないが、前書にならつて、わが国で出版あるいは記述されたネパールに関する資料を総記、歴史、政治、外交、法制、経済、産業、民族、文化、医療、衛生、自然、探検、紀行、トレッキング、登山、書評、図書紹介と大きく分類し、なおそれを各項目に従つて細分している。巻末には著者名索引があり便利である。

それにしても僅々四年にして一〇〇頁近いネパールに関する文獻が収録されるはその文運の隆盛を喜ぶと共に、わが国民の彼の国に対する関心の深さを思い知らされる。

さて、このような文獻目録はこれを利用する者にとっては実に便利で重宝なものであるが、これを *Hand book* にしてゆくとためには編者にとっては細

密な頭脳と弛まざる努力とが必要である。しかもなお個人の努力のみでは及ばないところが出てくるかと思われ、地味な仕事だけに報われるところ少なく、これがこうした書籍の編者の宿命かも知れない。

前著とこの補遺を所有することはネパールに関する一大図書館を身辺に置くことになる。

本学会員にしてこれを使用される方は進んで資料を提供して万遺漏なきを期したいものである。

一九八八年十二月、A5版、九八頁
T350-13 狭山市柘園18-31秋
山恭子 非売品 (斉藤健治)

(理科年表読本) 空からみる日本の火山

荒巻重雄・白尾天理・
長岡正利編

火山国日本には二百以上の火山がある。その内の代表的な火山五十をとり挙げ、それぞれについておもに空中写真を用いて解説した図説が本書である。中にはさまざまな火山のタイプが含まれているので、一種の火山目録でもあるし、火山辞典と言ってもよいだろう。分担執筆者は編者を含めて二十一名、いずれも第一線で活躍中の火山学者と目してよい人達で構成される。

本は横開き、A-ト紙使用で一見写真集のような体裁だが、内容は純地学的で程度が高い。あとがきによると「日本の火山を一般向きに紹介するとの趣旨で企画した」が、でき栄えを見ると「地形・地質・火山防災などの研究者・技術者にも充分活用して」もらえたと自ら評価を述べている。

火山の配列は北東から南西へ、北海道から吐噶喇列島へと順に続くが、南の方には硫黄島までも含まれている。活動の活発な火山や研究の蓄積のある火山が選ばれているせいか、網羅的にみえないが利尻山や苗場山などは見当らない。一方活火山でなくとも赤城山や大山などは採用されている。各火山について成立ちやその年代、新旧の構造、活動様式の変遷、外観の特色などが、最新の資料を用い新しい見解にたつて説明されている。空から斜めに撮影した鳥瞰写真と垂直空中写真の実体対(ステレオ・ペア)が必ず付く。著者らによる地上写真、図表が加えられ、さらに広域を収める宇宙画像やレーダー写真が挿入されている。つまり遠近さまざまなアングルから一つの火山へのアプローチが工夫され、懇切に編集されている。

山岳愛好家の目を惹くのはやはり大森弘一郎氏のパノラマ写真で、本書の鳥瞰写真の三分の一を占める。自然の

愛好家に火山の基礎的知識を提供する意義をもっていることは当然だが、渡島大島、鳥島などこれまであまり触れられなかった自然に接することもできる。さらに火山噴火による登山者の遭難の記録のある山―鳥海山、焼山などに、重大な関心を持たざるを得ない点も見逃せない。登山家により接近した立場での火山インベントリーがあれば、それに越したことはないが、その実現までは多少専門的な本書が充分役に立つと思われる。

平成元年一月刊、丸善、B5判、カラー二一九ページ、定価八四〇〇円
(式 正英)

石川の山

石川県山岳協会編

石川県山岳協会では大変立派な本を上梓された。協会創立二十周年と石川国体を記念して企画されたとのことであるが、この一冊で石川の山は大略把握出来ると言つてよいだろう。

最近の山の世界でも地方の時代になってきたのか、それぞれの地方の山を紹介する図書が相ついで出版されている。そうした数多い地方出版物の中で、この『石川の山』はその内容の豊富さにおいて抜きん出ていると言つて差支えない。山岳協会という大きな組織を

背景にして始めて可能であったと言える。巻頭の石川県山岳協会長の言葉のとおり、まさに「石川の山の百科事典」である。

取上げられた山は百三十三座。登山道のある山もあればない山もある。選定規準は「高さ・山容・景勝・歴史・信仰などのいずれかが優れているか、または三角点のある山」ということになっている。

それぞれの山は大体が見開き二頁で解説されている。まず写真があり、山名表示、標高、三角点の等級そして二万五千の地形図名が示されている。

解説の記述はさまざまだが、いずれも案内、故事、歴史、民俗、植生、注意などよく行き届いていて丁寧である。概念図があり、さらに交通の便、照会光、コース・タイム、主要施設、名勝・旧蹟、温泉なども要領よくまとめられている。記載された情報量は相当なものと言つてよい。

巻末には気象、動植物についての解説があり、また高度順山名一覧、石川の山異名一覧、各市町村の最高地点などの資料もある。

資料、情報量の多い中で、コラムの記述は石川の登山史、山岳誌にふれており、まさに石川の山の肉声を聞く思いがして読物として面白い。この立派な書物が資料として大いに

活用されることを期待したい。

平成元年五月、石川県山岳協会刊、
B5版、三九七頁、堅表紙、定価四
五〇〇円

金沢市丸の内三番三号 石川県体
育協会内 石川県山岳協会あて

(田中純夫)

報告

第十三回若葉会山行

六月十六日午後十時三十分、雨模様
のなか新宿スバルビル前を神崎さんに
見送られ「JAC号」は富山にむけて
出発した。参加者三十四名は例年より
若干少な目。これは他支部の行事と日
程の重なりが生じたためであろうかと
も反省する。

翌朝、中継点の上市町役場では町長
さんはじめ職員の方々と、地元JAC
から藤平副会長、若林支部長以下富山
支部メンバーの方々の歓迎をうける。

ここからマイクロボス二台に分乗、
大辻山長倉峠に向う。途中、青峠寺の
雄山神社に全員で参拝、山行の安全と
天候の回復を祈願する。長倉峠から太
田支部会員の先導で大辻山を目指すも
雨、降り止まず雨中の行軍となる。晴
れていれば絶品の山頂からの北アルプ
ス大バラマ展望もこれでは望むべく

もない。

雄山神社での祈願がきいたのか、下
山をはじめるときから雨も止み、天候の
回復のきざしがみえはじめ。馬場島
の宿舎でくつろいでいる間に天候はす
っかり回復、夕陽に輝く剣の峰々が、
眼前にまるでかぶさるようにその雄姿
をみせた時には、誰しも、その素晴ら
しい光景に喚声をあげずにはいられな
かった。

夜の交歓会は若林支部長、入沢理事
の挨拶に続いて、十三回無欠席の吉田
実さんの乾杯の音頭でスタート。食卓
には十四、五品もあろうかという盛沢
山の山菜料理に、甘えび、いか、岩魚
の刺身……とまさしく山海の珍味がと
ころ狭しと並び、わが胃袋を満たして
くれる。差し入れの地酒、岩魚の骨酒
の廻し飲みで舌鼓を打つ。酔いが廻る
程に「越中おはら節」やら全員輪にな
つての集会踊りが飛び出すやら宴はい
つはてるともつかない盛り上りであつ
た。

翌朝は四時起床。昨夜のアルコール
も抜けきらないまま、剣の展望台中山
までの散策を試みる。視界は良好、山
頂からの展望は格別だ。剣御前、剣本
峰、三ノ窓、小窓、大窓が手にとるよ
うにみえる。剣を仰ぎみての詩の朗詠
田中冬二「黒部の詩」を披露された地
元会員森丘實さんのリリシズムに心う

たれる。

剣よ、永遠に……と心に銘じ下山する。
帰路、姫川温泉で途中下車、朝方か
らの一汗を流す。車内では山の歌の歌
唱指導がはじまる。「なため」の作詩作
曲者小林碧さんの直接の指導を受けら
れたのは幸せだった。出発地新宿に着
いたのが午後十時過ぎ、予定より遅れ
ること二時間。全員無事に帰京できた。
今回の山行では富山支部の皆さんに
一方ならぬ世話になりました。紙上
を借りて厚くお礼申し上げます。

【参加者】 小林碧、吉田実、小田薫、

「石間信夫氏講演会」報告

六月二十八日、一年前のお話の続き
があると会報で知り楽しみにルームに
参集。これも前回拝見した石間さんの

「毛細血管地図」の印象が忘れられな
かったから。司会者と講師とのやりと
りからすぐにもビールの出そうな雰囲気
となったが、これではならじと全員
着席順に自己紹介ということになる。

先ず去年の集会以後一年間の石間さ
んの山行回数八十三回、登頂数千回以
上十三、四百回以上四、五回、従って現在山
行二三四回、登頂一四二〇回と紹介
あり。山行回数の日本記録(一)は更新
中で益々健在のお顔を改めて見詰め

継松義彰、中川尚、岡沢祐吉、船木威
志、小松原一郎、山崎直人、長嶋正浩、
原謙一、松沢君子、滝正子、井野千枝
子、遠田栄、遠田篤子、宿輪浩一、奥
谷潤之輔、入沢郁夫、佐近丸彦、荒井
紀子、楠本陽子、久保しの子、加賀莊
介、加賀礼子、中条昌子、西山俊恵、
大島洋子、平井拓雄、中川武、継松久
美男、藤田礼子、尾崎陽子、川善市、
牧野茂雄、藤平正夫、若林啓之助、石
坂久忠、木戸繁良、森丘實、佐伯久雄、
太田昭、相沢増平、水口武彬、高柳清
美、小川ゆき子 (集会・川 善市)

直した次第。以下当日のお話から(た
だし小生の独断的所感。失礼の点はご
容赦下さい)。

地図(五万分の一地形図)について

私の山行は地図を元に完璧な活用を
心掛ける。図上に道の有無は不要。自
分の現在地を確認することが第一。こ
れが案外難しいことがある。例えば富
士山麓樹海の中など。

自分の地図を次のように区分してい
る。(1)点(一枚の地図に一、二回だけ
行った所があるもの)、(2)線(四、五
回)、(3)面(五〇回)赤線が繋って
くる、(4)立体(一〇〇回)尾根、谷全部

踏破、これに該当するのは南部、清水、静岡、吉原の四枚か（まさに毛細血管地図の実物！―筆者注）。

この大切な地図は戦時中出征する時全部瓶に入れて蔵の前に埋めていた。だから無事で今日まで残っている。さらに滝の位置なども記入。裏にはコースタイムや時には山の景観スケッチ等種々書いてある。これは中学四年の時（昭和五年頃）塩見岳で黒田正夫・初子夫妻に会い、地図には何でも記入するよう教えられ以後今日まで実行してきた。

地図の折り方は軍隊折り。これは繋げて見るとき便利。軍隊式も悪いことばかりではない。これはまことに合理的的。

天気予報について

私は天気図をよく見る。三日分を重ねてみると判り易い。空を見て自分で判断する。天気には癖がある。私は予報が悪くても出掛ける。中止して後でよくなった時が口惜しいから。

山でのお化け、怖かった話

山で一人だと安心して自然に抱かれて眠れるが、反って他人気があると怖いことがある。全国各地で出会われた体験談の数々。
ヒマラヤの松毬^{ぼくろ}。

昭和三十年代、牧野さんと初めてエベレスト街道に行った時大きな松ぼつ

くりを拾って帰り、種を蒔き苗木から育てたが二十年で高さ十メートルになった。まことに自然の妙！

スキーについて

私は登るためにスキーを使った。下りには使わない？技術は直滑降・斜滑降・横滑り・股制動の四つ。荷物を背負って倒れたら大変だから。

何故山に登るか

自然の懐に抱れたいから。随分登ったようだがまだまだ。好きな言葉、道元禪師の「眼の横鼻近きを知り得たにすぎず」。

世界の山寸感

アラスカには六千級のマツキンリあり。ヨーロッパの山は美しい。アデス^{デス}はのんびり。アマゾンの奥には砂漠もある。エジプトではピラミッドに登りかけ監視員に制止された。台湾には雪は少いが三千以上の山が百六座もある。上高地で最初に登ったのは六百山。

途中から酒肴の登場などもあり、一段と熱のこもった懇談会となる。盛り上りの行きつく先は「是非石間さんと山行を共にしたい」との希望続出。その結論は委員さんにお委せして、最終の「こだま号」で静岡へ帰られるためご挨拶もそこそこにルームを飛び出して行かれた石間さんだった。

（河野之保）

タンボチエ僧院の再建に協力しよう（一口、五〇〇〇円）

リンジャニ山に登る

松永 康子

南の海のさんご礁に囲まれた島に紫色の大きな山が聳えています。富士山に似た美しい姿に、輸送船に乗った兵士達は遥かに離れた日本を偲んだとい

います。
リンジャニという山名を始めて聞いたのはもう三十年ほど前のことでした。

学生時代、山登りに熱中したK教授は戦争中このロンボク島に駐留していました。リンジャニが土地の言葉で「冷い岩」という意味を持つと聞いて、きつと雪か氷があるに違いないという思いに駆られるまま、現地人を連れた彼は南緯七度近くのジャングルの中を悪戦苦闘して大きな火口湖のへりまで登ったそうです。

残念なことに当時の山の状態では頂上まで登れず、平和の時代になったら必らずまた登りに来ようと心に決めて、戦後の日本に帰国したというのがK教授の話でした。

若い時の仕事のつながりから、連れていって貰った山旅の目標は、早池峯、岩手山、秋田駒ヶ岳、田代山、屋久島の宮ノ浦岳と、火山が多く、頂近くに湖や湿原・池塘があつて、裾野が広がり深い森のあることなど独特の基準めいたものがありました。そういう山を歩きながら「ここが似ている」、「いや、こんなではない」と話すその言葉で、いつの間にか私の心の中にまでこの南海に聳える紫色の山への想いが移り住んでいたのです。

いつかはきつとリンジャニに登ろうと思いつながら、ふんぎりもつかず何もできずに体力にも自信のないまま、遠征隊の手伝いにルーム通いをしていた折、事務局の児玉さんがジャワの山を研究しておいでのことを知りました。リンジャニにも興味を持ってくれた彼は、早速ロンボクのマタラム大学の山岳部に問い合わせてくれましたが、その返事には、うれしいことに登山同行の申し出まで書かれていました。一年間の準備を経て、今年五月の末から六月初旬の二週間で、黒石恒さん以下女性八名、同行の児玉さんと彼地の学生達の助力も得て、インドネシア

のリンジャニ山に登って来ました。海拔0から登る山は同じ高さの富士山より大きく、紫色の裾野は南太平洋の波に洗われています。

赤道の付近は初秋、花々の美しい季節でした。

スンプルラワンからの登りは明るく開けた草原からいくつかのピークを緩やかに巻きながら高度をあげてゆきます。リンジャニの頂は登るにつれて、火山礫岩のもつ紫めいた彩りをだんだんに濃くしながら、常に左手に眺められました。

日中の暑さを避けるために、山に入ってから毎朝二時半に起床、四時には、満天の星の下で山にお祈りを捧げてから出発します。しかし、実際には午前中は晴れながら午後には深い霧が立ち込めて暑さはなく、同行する現地の学生達はジャンパーを着たり手袋をはめたりして、私どもをおどろかせるほどでした。

頂上に登る朝も快晴でした。外輪山の瘦せた尾根に出てからは、右手深く切れ落ちた崖の下にエメラルド・グリーンの火口湖を見下ろし、左手には雲を吹き上げながらその果ては水平線に続く雄大な裾野を見て、富士山の須走りを思わせる砂礫の赤茶色の急傾斜をゆっくり登っていきます。「エーデルワイスに似ていますが、

少し違いますね」と砂の上にひざまずいた黒石先生がカメラに納めている白い花の株は、流れる霧に濡れてガラス細工のように光ってみえました。

頂上は、火口湖を囲む外輪山の最高峰で、私どもだけで満員になる広さしかありませんが、この外輪山の上に仮空の山体を乗せると、頂上の高さはきつと六千を越えたのではないかと楽しい想像もできました。たまたま出来たブロッケン輪が火口湖の上に仲間の姿を投影して見せてくれたのも素敵な眺めでした。

頂上での時間はどのくらいだったのか、巻き上げて来る濃い霧に追われるように下って昨夜のキャンプ・サイトに帰り、雨の中で徹収した荷を背負って再びクレーターを越え、火口湖スガラ・アナの湖畔に下りてテントを張りました。頂上往復後の、雨に濡れながらのこの急な下降は、私どもにとって結構きびしい「おまけ」でした。

その夜、K教授がようやく辿りついたという湖の水面には満天の星が映り、ひとときわ明るいオレンジ色の光の筋は、湖の中心からさざ波にのって私の足元にまで届いていました。

ロンボガン・リンジャニ隊として発足してから出発まで、準備会にはインドネシア語の勉強会やワヤン観賞も加

えました。おかげで私どもには行く先ざきで沢山の友達ができました。会話とはとうてい言えない片言でも静かに、熱心に耳を傾けて答えてくれる現地の人々の様子は、ずっと以前から知っていた、そう錯覚を持たせるほどの人間味と親しみがありません。

南の小さな島の人々と山から与えられたものは、計り知れぬほどに大きな、私共にとって素敵な旅でありました。

(リンジャニ登山の報告を、案内書としても役に立つことを目的にしてまとめました。ご入用の方は、山岳会ロンボガン・リンジャニ隊宛お申し込み下さい。送料込みで五百円です。)

熊本支部夏季例会

—山の映画とビールの夕べ—

これまで支部の行事といえば新年会と総会を除けば、おおむね懇親会を兼ねた山行ということになっていた。山岳会だから山に登っておればあまり文句も出なかったが、たまには山行以外の行事も考えようということで、いろいろ模索していた。

幸い会員の中に永く8ミリの趣味とされている方があり、山を題材にした作品があったので、昨年の夏季例会は

「山の映画とビールの夕べ」と題して催したところ、たいへん好評だった。そこで今年の夏季例会も(山行には暑い時期ということもあって、昨年に引き続いて第二回目の映画会を行うことになった。

七月二十九日、夏の暑い一日も暮れようとする頃、おなじみのレストラン「ホルン山小屋」に集まった。先ず冷たいビールで充分に喉を潤し一息ついたところで、ビデオと8ミリの上映となった。

映画は神谷会員の製作による「早春の仰鳥帽子」「黒岳の春」「上高地散策」の三作で、いづれも四季折々の山の彩りが鮮やかに描かれた見応えのする作品で、出席者の目を充分に楽しませてくれた。

また会場の一隅には、今年度に予定されている「山の写真展」の下見会として、当日、各人の持参してきた山の写真が所狭しと並べられた。日頃から山行に写真機を持参している人が多いせいか、思っていたより出来栄えのよい作品が揃って、どうやら人前に出してもあまり恥ずかしくない「写真展」が開けそうだった。

映画会終了後、ビールとおしゃべりで真夏の夜の一時を過ごし、外も少し涼しくなった九時半、散会した。

(田上敏行)



(8月)

1日 自然保護委員会
5日 三水会のみ市
7日 総務委員会
9日 常務理事会
21日 総務委員会
22日 婦懇・山研委員会
29日 山岳編集委・自然保護事務局・山百合の会合

会員異動 8月
8月来室者163名

退会

近畿大学二部体育会山岳部(六三八三)

物故

曾山志計雄(四六二〇) 6・18
福田 文二(四一二八) 6・11



☎ 234-6659

この電話で
お知らせ
しています

●懇親山行・甲州高尾山

婦人懇談会

期日 十一月二十五日(土)・二十六日(日)

集合 十一月二十五日 JR塩山駅午
前十時(先着二十名まで)

費用 約一万円

申込み先 日本山岳会婦人懇談会宛
申込み締切り 十一月十日(金)

●忘年会のお知らせ

総務・集会・婦懇委員会共催

日時 十二月九日(土)午後五時より

場所 日本山岳会 集會室

会費 二千元

今年の山々の話題、来年への夢、大いに飲んで語りましょう。新入会員の皆さんも大歓迎です!!

●会員懇談会「新入会員

の集い」ご案内

新しく入会されました方々の交流と、早く会に馴染んでいただき、山を通した仲間づくり、クラブライフを楽しんでいただければと「新入会員の集い」を開きます。会員番号一〇四二八番以降の方が新しい会員となっておりますが、新入会員のため、古参会員のご来席もお待ちしております。

記

日時 十一月十六日(木)午後六時三十分

会場 日本山岳会々室

会費 五〇〇円

問合せ・総務部 岩瀬ま
で、☎(自)〇三―四六〇
―六六三二、(勤)〇三―
二六五―二七二一。

なお、新入会員のオリエンテーションは毎年三月、その年の新入会員を対象に開催されますが、今回の交流親睦を主とした集り、気軽に参加下さい。

●年次晩餐会

(予告)

毎年十二月第一土曜

日に年次晩餐会が開かれています。今年も次の通り開催予定で準備中ですが翌日はハイキングも計画。早目にスケジュールを調整のうえぜひご来席下さい。

記

日時 十二月二日(土)、

午後六時開会。恒例のパーティタイムが開会前に設けられます。

会場 市ヶ谷・私学会館
詳細は後日ハガキに

図書受入報告

図書委員会

平成元年5月分受入報告

1. 梅沢俊著「諸国名山案内 第1巻」山と溪谷社 1989(粕谷俊矩氏寄贈)
2. 「新・美しい自然公園 1(雲仙) 2(上高地) 3(川湯) 4(支笏湖)」自然公園美化管理財団 昭和 61-63 4冊(版元寄贈)
3. 日本自然保護協会「丹沢の自然観察」同協会 昭和 62(版元寄贈)
4. 日本自然保護協会「利尻・礼文・サロベツの自然観察」同協会 1987(版元寄贈)
5. 日本自然保護協会「吉野の自然観察」同協会 1987(版元寄贈)
6. 岳人編集部編「山の物識りノート」東京新聞出版局 1989(版元寄贈)
7. 小倉厚著「健康ウォーキング・奥武蔵秩父編」埼玉新聞社 1989(版元寄贈)

8. 福岡まいづる山岳会「まいづる草 No. 400」同山岳会 平成1(版元寄贈)
9. 大森弘一郎著「山岳飛翔」岩波書店 1989(版元寄贈)
10. 高田宏著「木に会う」新潮社 1989(版元寄贈)
11. ハヴラサ、ヤン著「アイヌの秋」長興進訳 未来社 1989(版元寄贈)
12. 宮本袈裟雄著「天狗と修験者」人文書院 1989(版元寄贈)
13. 宮下充正著「山歩きのサイエンス」東京新聞出版局 平成1(版元寄贈)
14. 石橋睦美著「諸国名山案内 2: 東北」山と溪谷社 1989(版元寄贈)
15. マッキンリー遭難対策本部「マッキンリー遭難報告書」同本部 1989(同本部寄贈)
16. 荒牧重雄等編「空からみる日本の火山」丸善 平成1(版元寄贈)
17. ハイキング部かやと会「六十年史」同会 昭和 63(同会寄贈)
18. スイス山岳財団編「マウンテン・ワールド」小学館 1989 1セット(7冊)(版元寄贈)

てご案内いたします。

●現地小集会「吾妻耶山」

集會委員会

谷川岳の南に在り、山歩きのあとはいで湯「川古温泉」で入浴。静かな初冬が楽しめます。

集合 十一月十二日(日) 上越線上牧

駅午前八時四十五分

コース 上牧―大峰沼―吾妻耶山―仏

岩―川古温泉：(タクシー)

後閑(十八時頃着予定)

費用 二千元(入浴・タクシー代)

申込み 十月三十日迄事務局へ

タンボチエ僧院再建協力

募金者、芳名

五万円―福岡支部。三万円―今井友之助、鈴木羊三。二万円―エベレスト日本女子登山隊。一万円―松田雄一、長沢光和、平野真市、大塚博美、野口篤太郎、斎藤惇生、田部井淳子、田辺寿、加納巖、久野英子、木村勝久、山崎健、清野恒、辻政信、橋本清、中川寛。六千円―内田良平。五千円―安藤久男、穴田雪江、住吉仙也、佐藤茂、山本浩、大森薫雄、山本一夫、井上治郎、熊崎和宏、藤崎昌美、小倉厚、堅野正三、河野長。三千円―林田豊三郎、早三栄二、岩瀬秀郎。二千円―山戸潔。

九月三十日現在合計三十八名、三十七万二千元。さらにご協力を願います。

訂正 八月号(五三〇号)

二頁一段十八行目 墳さん↓墳さん

二頁三段目後より二行目 今西寿雄名誉会員↓今西寿雄評議員

十一頁四段十九行目 石綴白↓石徹白

十四頁一段十四行目 小野道男↓小野

口道男

十五頁三段後より八行目 十月二十三日↓十月二十二日

あとがき ◆まだまだ、会報が十七字ツメだということを知らない会員が多いようです。今後、投稿は十七字で必ずお願いします。また、人名、地名などの固有名詞はとくに判りやすく(楷書)、しかも正確に。

◆なお、重ねて。原稿の送り先は次へ。〒338 浦和市木崎5-15-8 小倉厚 (A・O)

平成元年十月二十日

102 東京都千代田区四番町五―四

サンビュウハイツ四番町

発行所 法人 日本山岳会

発行者 山田二郎

編集代表 小倉厚

電話東京(廻)四四三三

振替口座東京三一四八二九番

東京都港区赤坂一―三―六

印刷所 株式会社技報堂